表紙の写真

ドイツ・恵光寺（エコーハウス）本堂前での集合

第十四回ヨーロッパ真宗会議は、二〇〇六年八月下旬にドイツ・デュッセルドルフのエコーハウスで開催されました。写真は、内外からの参加者が本堂前に集合して記念撮影したものです。

写真では、前列中央に本願寺新門大谷光淳さまと新裏方流豆美さま。向かって左に中央から青山隆夫エコーハウス所長、佐々木恵精協会事務局長、右に中央から新門さま随行で徳永道雄国際真宗学会前事務局長、林　安明本願寺国際部部長。地元ドイツをはじめ、イギリス、スイス、ベルギー、ルーマニア、ポーランド、ハンガリーなどのヨーロッパ諸国、遠方の米国アラスカ、オーストラリアから篤信の念仏者が集いました。

恵光寺は、仏教伝道協会創始者故沼田恵範氏の発願により九十二年に竣工した仏教寺院（浄土真宗本願寺派恵光寺）、日本庭園、お茶室、多目的ホールや図書館からなる、ヨーロッパにおける仏教の伝道、日本文化の発信施設です。

もくじ

「承応の閲牆（げきしょう）」　千葉　乗隆 ……3
第十四回ヨーロッパ真宗会議報告　柏原　信行 ……4
特別事業
ヨーロッパ真宗サンガを訪ねて ……6
「バートライヘンハル（ドイツ）訪問記」　新井　俊一
「ドイツ、ルーマニア視察報告」　石田　法雄
ヨーロッパ真宗サンガからの便り……10
「ドイツ・バートライヘンハルの信堂から」　トーマス・モーザー
「ルーマニアの他力道場サンガから」　アドリアン・クィルレア
ＩＡＢＣ活動報告・決算報告 ……13
ＩＡＢＣ協賛会員の募集
―念仏の輪を世界の友に―
ＩＡＢＣ役員体制・編集室より ……15

承応の閲牆（げきしょう）

―ＩＡＢＣ理事長　千葉　乗隆

先日、スイス・ジュネーブのジェローム・デュコールさんが来日し私を訪ねてきた。彼は数年前から研究している「承応の閲牆」の史料調査のためであった。

デュコールさんは以前に初期真宗の学者存覚上人の研究で学位を取得していたが、その後、近世の真宗学に関心をいだき、三大論争―「承応の閲牆」「明和の法論」「三業惑乱」―のうち、「承応の閲牆」の分析に着手した。

「承応の閲牆」とは承応二年（一六五三）に起こった兄弟喧嘩ということである。

それは紀伊（和歌山県）性応寺了尊の門弟に肥後（熊本県）延寿寺月感と筑前（福岡県）永照寺西吟がおり、西吟は本願寺学寮の能化（学長）に任命された。月感は西吟の講義内容を聞き禅宗的であるなどとしるした弾劾状を本山に提出した。

その時の本願寺門主良如上人は両人の和解を図られたが、月感は応じなかった。脇門跡興正寺准秀上人は、その子息が月感の養子になっていたので、月感を支援し『安心相違覚書』を書いた。これにたいし良如上人は『破安心相違覚書』を著して反論されたので両門跡の論争となった。

ここにおいて、もはや幕府の裁定を求める以外に手だてはなかった。その結果、論争のきっかけになった学寮を破壊すること、准秀上人は越後（新潟県）、月感は出雲（島根県）にそれぞれ流罪に処すとの裁定が下された。

この事件について、デュコールさんがとりまとめた原稿を見せてくれた。しかし、論文はフランス語で書いているので、私には理解できなかった。ただし、人名、書名など固有名詞には日本語の註記がされていたので、大筋の理解は可能であった。

彼の論文は良如上人を支持する内容であった。その結論にいたる経緯は、安易な既成論文の依拠や引用によることなく、原史料を解読して、それに立脚した手堅い研究内容であった。

デュコールさんは、右に述べたような、すぐれた研究者であるとともに、またジュネーブの信楽寺の住職として活躍する、すばらしい念仏の行者である。

私は彼と話していて、日本の僧侶は、彼に学ばなければならない点の多いことを痛感させられたのであった。